

## 私の教育実践－特殊教育から特別支援教育へ－

愛媛県立今治特別支援学校 校長 丹下 徳子

新型コロナウイルス感染症の流行で学校には様々な波が押し寄せています。特別な支援を必要とする児童生徒の発達や成長を支えるために、いろいろな形でコミュニケーションを取りながら支援を行っている本校でも、児童生徒との物理的距離をとり、マスクで互いの表情が分かりにくくなる状況にもどかしさを感じながら、繰り返し到来する波を乗り越えることに心を砕きつつ、教育活動を行っています。



私は今治養護学校で教員生活をスタートしました。当時障がいのある児童生徒への教育は特殊教育と称され、主な教育の場は特殊学級や盲・聾・養護学校でした。1990年代以降世界的に障がいの概念が「医学モデル」から「社会モデル」へと変化し、2006年には「障害者権利条約」が採択されました。日本でも2007年（平成19年）4月から、障がいのあるこども一人一人が教育的ニーズに応じた指導を様々な場で受けることができる特別支援教育が始まっていますが、学校が、児童生徒と教職員が笑顔で、時には真剣に関わり合いながら学び・成長していく場であることは変わりません。

「こどもにまかせてはどうか」

これは新採2年目の私がラジオで聞いた言葉です。子育ての悩みを訴える母親に対して児童心理学者の平井信義先生が「こどもにはこどもなりの思いがあります。こどもにまかせてはどうか」と穏やかな口調で答えました。当時受け持ちの児童Aさんが朝の周回走の回数指示を聞き入れず、私「3回走ろうね」→Aさん「いや」→私「走りなさい」。結果、Aさん：決められた回数を走らない→私：叱る、という繰り返しに悩んでいたもので、翌日早速実践しました。「Aさんは何回走りたいの？」おずおずと自分の希望を伝えるAさんに、「いいよ。1回がんばろうね」と伝え、走り切ったAさんを褒めることを続けました。Aさんはその後、2回、3回と周回数を増やすことができました。平井先生の言葉は、知的障がいのある児童

生徒は教え導かれる存在であるという私の思い込みを正してくれた大切な言葉です。

### 「情報を視覚的に示すことで安心する」

平成8年に2度目の本校勤務となり数年後、Bさんを受け持ちました。Bさんは読み書きやおしゃべりができましたが、トイレに行こうとしない、教師の指示を素直に受け入れないなどの課題があり、指導に苦慮していました。その時ある先生が「トイレに行くことをスケジュールに示すとよいのでは」とヒントをくださいました。言語指示が分かり、自分の意思を伝えられるBさんに個別のスケジュールが必要とは思えません。それでも試してみると徐々にではありましたが効果があり驚きました。

Bさんがその後自閉症と診断されたことから、私は自閉症の勉強会に参加するようになりました。そこでは以前学んだ情緒へのアプローチや遊戯療法といった支援方法ではなく、認知機能や実行機能の障がいに対する働き掛けが中心となることを知り、自分の学びを常にアップデートすることの重要性を痛感します。また「予定を確かめたり、意思を伝えたりするためにスケジュールや絵カードを用いることは、眼鏡を掛けて見え方を補うことと同様に、その人にとって必要で欠かせないことである」という児童精神科医師の言葉で、情報を視覚的に提示することの必要性を認識できたのです。児童生徒への適切な支援とは何かを改めて考える契機となった経験です。

奇しくも、教員生活をスタートした学校で退職を迎えることとなり、未熟な私が関わってきた児童生徒、温かく見守ってくださった保護者の皆様、教職員の皆様のことを思い出しています。これまで出会ったすべての方々に心から感謝いたします。